

信州五感塾報告



平成21年10月24日～25日

於長野市松代町・小布施町

志塾3期生 宮本吉寿さんのプロデュースによる五感塾が秋深まりゆく信州の地で開催されました。現役・卒塾の塾生／家族及び再生日本の石原さん・宮崎さんの志塾関係者のみならず、外部団体（コカ・コーラ様、帝人様、そして準塾生？杉本哲也さんのご友人）からの参加者を加えた計18名による、和気あいあいの中にもさまざまな学び・体験の詰まった2日間でした。

初日：10月24日：松代

長野駅からバスに乗り、いざ松代へ。道中左手に川中島古戦場を眺め、千曲川を越え、最初の目的地：松代象山地下壕に到着。

松代地下壕訪問の狙い：太平洋戦争敗戦直前に松代で行われていた軍部の行動が分かる貴重な戦争遺産を体験する。また、この地下壕歴史を25年に渡って調査する地元長野俊英高校郷土研究班の活動を知る。このことを通じて、太平洋戦争への認識を深めるきっかけとする。



松代象山地下壕



太平洋戦争末期、大本營が本土最終決戦の拠点として、秘密裏に工事を着工。皇居、大本營のみならず、政府機関、NHKなどの本格的な移転を念頭に昭和19年より9カ月、敗戦による工事中止まで全行程の75%は完成していた。

太

その後は放置されていたが、現在長野俊英高校教頭の土屋光男氏による調査、研究から始まり、現在では俊英高校の郷土研究班の聞き取り調査、研究発表、地下壕ガイド活動は高く評価されています。

当日は残念ながら、土屋先生のご都合が悪く直接お話を伺うことが出来なかったのですが、研究班卒業生で現在母校の教員である大塚先生の引率の下、郷土研究班の高校生解説による地下壕見学に向かいました。



実際に掘削された10キロ近くの全貌に比べれば、見学出来るのは500m余りとほんの一部に過ぎないのですが、実際に地下壕内に入ると、このような強固な岩盤を掘削させてまで敗戦濃厚な戦争を継続しようとした軍部の愚行、戦争の狂気を肌で感じるものでした。

これまでは日本人のみならず朝鮮人も強制招集して工事をさせて、そのため多くの犠牲者が出ていた、と考えられていました。ところが

昨年、従来の通説を覆す証言が得られた、と最新の調査結果を聞くことが出来ました。

聞き取り調査によると、必ずしも朝鮮人労働者強制招集→過酷な労働→死亡ではなく、きちんとした待遇のもと、朝鮮人自らが職を求めてこの地での労働を行い、現地の日本人との交流があった、ようです。



れきみちの家



次の団体のガイド案内のため今まで解説してくれた郷土研究班の高校生たちと別れ、次に地下壕を出て、すぐ近くに建てられた研究班の活動拠点であり、観光客への活動報告の場ともなっている「れきみちの家」を訪れる。

ボランティア小川久雄さんの解説により、これまでの活動成果、当時の生活の品や工事関係の道具などの展示を拝見する。ひときわ目を引くのが、研究班の高校生が作成した「西条地区強制立ち退き（受け入れ）地図」である。

研究班の聞き取り調査は、当時天皇御座所として予定された地域より高い所に住むのはけしからん、という理由で強制立ち退きさせられた当時の日本人の方々へも聞き取り調査を行っており、かつてどこに住んでいたのかが判明した戸数は100軒を超えていた。

これら一連の活動を見ての個人的な感想であるが、「朝鮮人労働者は実は虐げられていたのではない」という解説には、そういう面があったと証言があるのだから認めるけど、全員がその



ような好待遇であり、日本人とも友好的に働いていた、というのは本当かな？と疑問に持つ点はある。しかしそれ以上に、本来なら長野市教育委員会など公で行わなければならない松代地下壕の調査・研究が、土屋先生という一個人の尽力があって今の私たちがこの負の遺産を体感できることへの感謝の気持ちが湧いたことである。この「れきみちの家」に関しても、土屋先生のポケットマネーで作られ、維持・管理されているとのこと。「お金がないから節約して運営しています」と小川さんは仰るが土屋先生の献身的な活動がなければ、今日我々は地下壕について知ることが出来なかったことを考えると、ぞおっと寒気もする。

最後に郷土研究班は土屋先生のリーダーシップの下、「松代地下壕の世界遺産登録」という大きな志を持って活動を続けている。現実的には年々世界遺産登録への道は厳しくなっており、かなりの困難が予想されるが、「観光客増目当ての安易な登録準備活動」が目立つ他の候補地と比べ、はるかに純粋な動機に基づく活動には大変共感し、志の高さでは志塾生として大変大きな刺激を受けました。

信州が生んだ幕末の偉人：佐久間象山



ペリー来航前から、海防の重要性：『海防八策』を説いた幕末期きっての思想家。また独学で大砲製造や日本初の電信通信を成功させるなど、文系・理系両面で当時の日本の最先端の行くスーパータレントの偉人。門弟に吉田松陰、勝海舟、坂本龍馬、河井継之助などそうそうたる偉人が並ぶことからその実力のほどが分かる。しかしあまりに切れすぎるため、当時の人々、特に保守的な傾向の強い松代藩には収まりきらず、また彼自身の高慢な性格がなおさら敵を作るという悪循環のため、地元松代では彼意思を継げるものがいなかったのが惜まれる。

弟子吉田松陰の下田密航事件の責任を問われ、9年間の蟄居生活ののち、松代藩に見切りをつけ、一橋慶喜に招かれ上洛。公武合体と開国を唱える活動が尊王攘夷の志士を刺激し、1864年池田屋騒動後、天誅の嵐が吹き荒れる京都にて暗殺される。享年53歳。

佐久間象山を知る：本来の実力を発揮できれば、吉田松陰を遥かに凌ぐ影響力を及ぼし、明治維新のあり方を変えたのは間違いないが、現在の知名度では残念ながら弟子松陰を遥かに下回る。普段はあまり知る機会のない象山だが、出身地松代にて埋もれた偉人の功績を学ぶ。

ここからの「佐久間象山ゆかりの地」をベテランガイド小林貞夫さんの解説の下に巡りました。

松代藩文武学校



象山の建白書を受け、1856年に開校。他藩の藩校と違い、儒教の教えを排除したため構内に孔子廟がない特徴を持つ。この学校での教育は、藩士に対し学問と武道の両道をめざし、漢学・国史・剣術・総術・柔術・弓術をはじめ、特に佐久間象山の進言により西洋医学・西洋砲術に力を入れた教育を行いました。この地で砲術を学んだ人材が戊辰戦争官軍勝利にも貢献しました。

授業は藩士の子弟8歳から14歳迄が漢学を学び、武芸は15歳から35歳ぐらいまで本格的に学びました。1年1回試験が藩主の前で受けるという厳しいもので、成績が良ければお殿様からお褒めにあずかり、悪ければお父さん共々しかられ本人は落第となったそうです。

明治6年より松代小学校として昭和40年代後半まで使用される。ガイドの小林さんもこの学校の卒業生として、当時の様子を生き生きと語っていただきました。



佐久間象山記念館



佐久間象山の遺墨や遺品、関係書類が陳列されています。特に独学でシュメール『百科事典』読解に基づく自作の科学機器の数々（写真機や大砲、ガラス、電気治療器等）には圧倒される。

その中でも電信機器は、松代にて日本初の電信通報実験成功を記録しており、故松下幸之助氏がその偉業を評価して、左のような木造を寄贈している。

象山神社



じた。

佐久間象山生誕の地に現在、象山を祀る象山神社がある。この神社訪問のハイライトは高義亭である。松陰密航の連帯責任を問われて、蟄居謹慎処分中に居住した屋敷。松代藩内では厄介者扱いだったが、中岡新太郎や高杉晋作など、象山の教えを希望する志士は絶えなかった。実際に中岡や高杉との会見の間に入ると幕末の歴史を動かした大物の会見が行われた高貴な雰囲気強く感じた。

象山地下壕、佐久間象山ゆかりの地めぐりを終え、松代での予定は終了。歩き疲れた体を車中で休め、一路小布施に向かう。

宿泊地であるユースホステルにチェックイン。荷物を預けた後、夕食会場へ。参加者の自己紹介・今日の松代訪問の感想の発表・意見交換に加えて、お互いの仕事のこと、出身地のことなどで話が盛り上がる。明日訪問予定の木下さんも参加していただき、正に時の流れを忘れる楽しいひと時であった。

ユースホステルに帰ってからも、ビール片手に懇親会は続いた。明日の座禅のため早起きできるか？の不安もよぎりつつ…



2日目：10月25日：小布施

岩松院

1472年創設の歴史ある曹洞宗寺院。
安芸広島の大々大名になった後、幕府の不条理な国替えでこの地で死去した福島正則の霊廟があり、小林一茶が瘦せ蛙負けるな一茶これにありを詠んだことでも知られる。のみならず、葛飾北斎 八方睨み鳳凰図（下参照）が有名。



早朝座禅体験

睡魔と闘いながらも、無事全員早朝座禅に参加。私としては、3年前の延暦寺根本中堂以来の座禅体験。久しぶりの座禅・自己との対話の経験はわずか10分とはいえ、すがすがしいものであった。ただ、きょうさく（叩く棒）の使い方が延暦寺と随分違うなども感じた。「大きな音はするが全然痛くない」延暦寺式と比べ、岩松院の和尚さんの作法では随分個人差があるようである。私は幸い大した痛みがなかったが、他の参加者にはけっこう辛かったらしい。音も随分違っていたし。



その後、堂内にて朝のお勤め・講話の後、特別に「八方睨み鳳凰図」を本来の見方である畳上に寝転んで拝見する許可をもらう。「どこから見ても鳳凰が睨みを利かす」鳳凰画の真髄はやはり寝転んだ体勢から見ないと体験できない。下見の時は、一般客同様立って首を上に向けてただだったので正直言って凄みは分からなかった。この体験をさせてくれた和尚さんに感謝する。

朝食をユースホステルで取った後、文屋 木下豊さん宅へ向かう。

小布施町づくりレクチャー

どなたでも自由に受け入れるオープンガーデンのお庭を通り、木下さん宅へ入る。手作りの栗お菓子やリンゴなどのおもてなしを受けながら木下豊さんから「小布施まちづくりのレクチャー」を受ける。



小布施の町づくりのキーワードは「美日常」。観光客を集める観光資源がなく、また観光客集客を意識した無理な「非日常」の演出もしない。

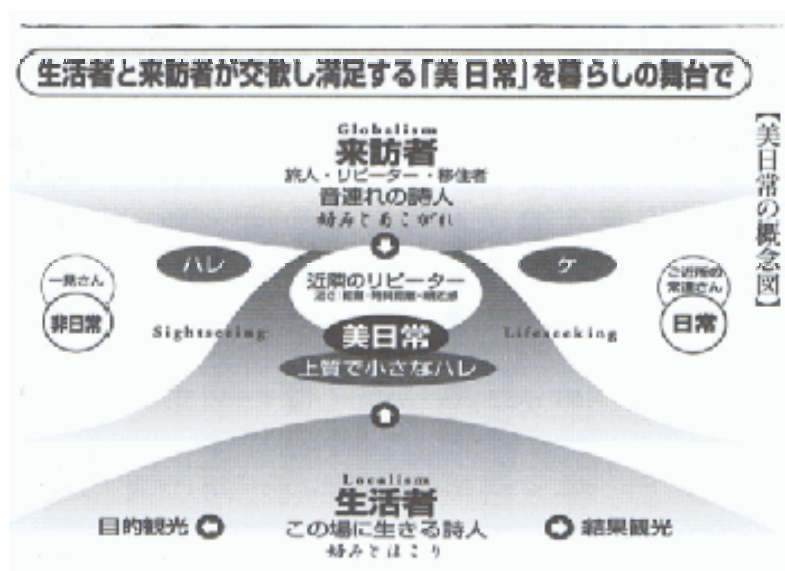
あくまで小布施に住む住民のすてきな日常の生活：美しい日常、住民が主人公のまちづくり。いきいきした小布施に訪問する人々を「観光客と特別扱いせず受け入れる」小布施町。「たいくつな日常」でも「たいへんな非日常」、どちらでもない「美日常」。

住民と訪問者、双方の満足が調和した、独自性の高い生活文化・経済文化の創造に取り組み続けた小布施の魅力はリピーターの率の高さからも窺い知ることができます。また、小布施は「6次産業のまち」としても知られています。特に栗は、生産（一次）×栗菓子の生産（2次）×販売、小布施ブランド化（3次）＝6次産業、という意欲的な取り組みが行われています。

補助金もなく、観光課もない。行政に頼らず、すべて住民自らの取り組みで魅力ある町づくりの成功事例として小布施は大変面白い町である、とリーダーの木下さんのお話を聞いて感じました。

木下さん宅を後にして、小布施町の中心街に向かう。ここからは小布施の魅力を伝える

第一人者である小林暢雄さんにガイドしていただく。木下さんのレクチャー、小林さんの解説を踏まえて小布施の町なみをじっくり見学する。お金をかけずにじっくりまちづくりを行っている様子（町長宅のオープンガーデン等）を実感することができました。



北齋館



言わずと知れた、『富嶽三十六景』を始めとした数々の作品を残した、世界的にも有名な浮世絵師葛飾北斎の作品を一堂に堪能できる。掛軸、額装、屏風、画帖など北斎肉筆画や画稿、書簡なども凄いが、北斎の天井絵をはめこんだ2基の祭屋台は圧巻でした。

高井鴻山記念館



高井鴻山肖像(横山上龍画)

薩長倒幕派との抗争に敗れ、明治期には高井家はかつての勢いを失いました。明治に入ると鴻山は東京・長野に私塾を開き、教育に尽力しました。

葛飾北斎が晩年の4年間を小布施で過ごしたのは、小布施の豪商：高井鴻山の招きがあったからです。江戸で知り合い、北斎の門下生となった鴻山が晩年の北斎のためのアトリエ「碧瀟軒（へきいけん）」を提供。岩松院の天井図のみならず晩年の北斎の創作活動を援助した。高井家は、朝廷から幕府、大大名相手に手広く商いを行う小布施を代表する豪商。

鴻山は幕末維新の激動期に陽明学の"国利民福"、貧民救済を行いました。15歳から16年間、京都や江戸へ遊学で各界第一人者から多彩な学問や芸術を納め自由で幅広い人脈を築き、佐久間象山はじめ思想家や文人たちと交流において、日本の行く末を憂い、巨万の財力を幕末の变革支援に投資。しかし



信州そば打ち体験



小布施でのプログラムを終え、一路中野市の古式本格手打ちそば処「天悠」に向かう。

今回の五感塾最後のプログラムである、信州そば打ち体験！！

そば打ち師匠宮本和義さん始めお母様、奥様と宮本家総出で出迎えて頂いてのそばうち体験がスタート。



2人ひと組で慣れぬそば打ちに悪戦苦闘する中、初めてにしてはスムーズにそば打ちが出来る人が一人！かつてパン職人だった宮崎さん。材料こそ違えコツは同じなのか、ひときわ手際の良さが目立ちました。



さて、実際に自分たちで打ち、切ったそばをゆでてもらい味わう。初めてとはいえ確かに「自分たちが作ったそばが旨い」と感じる事が出来たのは、やはり宮本師匠始めお手伝い頂いた方々のおかげである。最後に、この2日間の感想を全員が発表し、再会することを期して長野駅で解散しました。



大変実り多い五感塾を企画・運営した宮本さん、御苦労さまでした。また素晴らしい参加者に恵まれ充実した五感塾であったことに感謝します。

文責) 志塾3期生 山本晃司